福井梅（三方町）の特性と燐硝安加里の追肥

河　見　泰　成

全国の不作説をよそに
大豊作に恵まれた三方町

“つけ梅や，つけ梅。”昔は，梅雨の束の間の小休止を見はからっては，売り子が甲高い売声を街の中を流したものである。夏の風物詩の一つであるが，いまは殆んど聴かれなくなった。

さてその梅の実であるが，ことしはどうやら不作らしく，全国的な品薄を反映して，出はじめから相場はずっと堅調をたどっている中にあって，“6分作結構.／”“高値ますます結構.／”と“不作高値”を謳歌（おおか）している産地がある。

国鉄敦賀駅（福井県）から小浜線に乗って舞鶴方面に向い，美浜町にかかる頃から右側の車窓に小湖水が見えてくる。いわゆる“三方五湖”（三方湖，水月湖，日向湖，久々子湖＝くぐしこ，菅湖＝すがこ）で，これら5つの湖水をとり巻く平坦地や，周辺の山々の山麓から中腹あたりにかけて，200町余の梅園が展開している。他産地の不作はどこ吹く風…，前年対比実に120％という大豊作に恵まれて笑いがとまらぬ産地とは正にここ“福井梅”或は西田梅の代表的産地として知られる福井県三方郡三方町一帯の地域である。

三方町農協の正面

年間平均気温14～15°C程度，日本海の寒気も周辺の山々が中断して呉れるお蔭で，ともすれば豪雪を連想し勝ちな北陸地方にありながら，降霜も殆んど見られないという天与の環境条件（一説には“三方五湖”の水が，梅の生育を適当にコントロールしているのではないかとも云われている。）に恵まれたことが，“福井梅”の産地としての三方町周辺の名声を高からしめる原因の1つであることに違いないが，このほかに生産，指導，農協3者間の強い結合を忘れてはならない。

梅と云えば，拙宅の庭にも1本の加賀白の梅があって過去十数年来確実に1斗以上の収穫を続けているだけに，かねがね“梅”の産地を訪問してみたいと考えていた訳だが，そんな筆者の気持をピタリと当てるかのように，大阪営業所の西森さんから“6月23日午後3時半頃敦賀駅に来い。”という連絡があり，“吉報到来.／”とばかり，さっそく現地へ飛んだ。

6月20日現在，500トン出荷
金額は待望の1億円を突破した

敦賀駅頭では西森さんだけかと思っていたら，思いもかけず，そこには所長代理の林さんの顔も見えていた。長駆，鳥取から来られたのこと。職業柄とは云えご苦労様なことである。

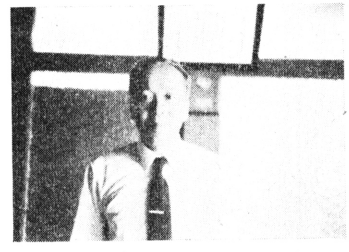
現地＝三方湖畔へは翌24日に行くことになっているので，その前に現地事情を伺っておくため，敦賀市本町にある福井県二州農業改良普及所に福井県農林部農政課の“果樹専技”田辺賢治さんをお訪ねした。

この日，田辺さんは大変多忙だったらしく，5時半頃になって汗をふきながら帰ってこられた。

“皆さんお待ちになっていることは充分承知しておりましたが，次から次と用事ができまして遅れました。東京からおいでになられたそうでご苦労さまです。”と前置きして田辺さんが話された“西田梅”（福井梅）の概要は別項の“西田梅”の沿革をご参照願うこととし，ここでは触れないでおく。

“今年の梅が不作であることは決定的で，当地でもkg当り600円の高値が出たほどですが，ちょうど39年度に実施した農業構造改善事業で植栽した梅が，8年生として既に収穫期に入っている折柄だけに，今年の値段については非常に気になっていたのでしたが，全国的な不作をよそに本県が豊作に恵まれたことは，何とも申し様がないほどで…嬉しいと思います。”

“今年の収穫は600トンないし700トンと予想されておりますが，6月20日現在既に500トンを出荷，金額も待望の1億円を



三方町農協の鳥居会長

突破したと報告されております。これまで最高9千万円という記録はありますが，どうしてもこれが抜けなかっただけに，農家の喜びは，さこそーと想像されます。収穫高も過去に800トンという最高記録があるそうですが，この方でも或いは…という希望が実現するかも知れません。関係者の一員としてこんなに嬉しいことはありません。”

（当地だけ前年比120％とは…）
（作柄を説明する浜本さん）

果樹専技として日夜指導に精励されておられる田辺さんの感慨がピンピンと筆者の胸にも響いて来る。

“出荷先？そうですねえ，昔は京都を中心として出荷されておったようですが，三方五湖周辺の環境が整備される一方，トラック輸送の発達とともに，この頃では遠く新潟をはじめ名古屋方面へも出るようになりましたが，全体の60～65％はやはり北陸向けに出荷されているようです。”

8年生の梅園（向笠地区で）

“当面の問題点？それはやはり撰果作業を含めた収穫費の低減，云いかえれば，どうしてコストを下げるかということでしょう。幸い本年からは，大型の共同撰果場が完成し稼働を始めたので（毎時4トン2セット），最終段階の撰果，パッキング作業がグッと違ってきます。”

“何しろ，これまでの実績によりますと，10a当りの年間所要時間230時間に対して，120～130時間を収穫に要したということからもお判りになるでしょう。雇傭労賃も馬鹿になりません。2千円から2千5百円の約束で1人いれたとしても，それだけでは済まないし，どう多く見ても1日100kg（10函）の収穫が限度というところから割出して，これ以上撰果に手間どってはとても引合わない。”

三方町農協の共撰場左側部分
（人物は左から林さん西森さん）

“もちろん各農家は全部個撰機を持っておりますから，収穫的には夕方まで採取できるとしても，明日の出荷手順から割り出して点数制度を採用したらどうだろう。たとえば，午前10時まで採取したものはプラス何点，午後3時までに収穫したものはマイナス何点といったようにすることも，一つの合理化策であると思います。ただ，なるほど新しい大型機が入った立派な撰果場ができた，そして全量共撰が実現し，1日60トンの割りで作業が進んでいますが，6月中旬の収穫はじめから7月5日ないし，遅くとも10日まで実際の稼働日数は20日ないし25日程度に過ぎない。この点をどうして解決するか，問題は残りますね？”

福井梅の沿革

三方五湖周辺に展開する梅園の原木は，三方湖ぞいの伊良積部落の西田梅園に残る3本がそれだと云われている。伝説によると今から200年前の天保年間に実生で発生したとも，或は西田平太夫という人物が始めたので，この名がついたとも云われている。伊良積部落の梅の共同集荷場付近に“特産西田梅原木”としるされた小さい石柱が立っていて，その前の傾斜面を50mほど登ったあたりに，主幹がボロボロになった老木が3本ある。葉はまだ若干着けてはいるが，その老化の実状は見るに忍びない。もう手のつけようがないのだろうか？

この伊良積産の梅を“平太夫梅”と云い，果肉が厚く，核が小さいので，梅干には最適だとして，関西市場で好評を博していたと云うが，明治時代に入ってからは生産量も少なく，かつ交通も今日のような道路はなく，もっぱら湖水をわたる舟便を利用する以外に方法がなかったので，伊良積の存在は認められなかった。

平太夫梅は丸味中型の早生種で，品質は優良だが収量が少なく，樹勢も弱いという欠点があったので，多年にわたり品種改良が進められた結果，現在では中生大型の“剣先”と中生丸型の“紅映”（べにさしとも書く。）の2品種にほぼ統一されている。この両品種は全国的にも稀れな優良多産品種だと云われている。（最近このほかに“高南”などが導入されている。）なおこの品種改良には，明治20年代から伊良積の田辺市太夫，今井熊吉氏らが功績があったと伝えられている。

明治，大正時代の西田村は殆んど陸の孤島で，前述のように湖の舟便による以外に方法が無かったので，朝早く三方湖を小舟で水月湖に出て対岸の北西郷村に上陸して，若狭街道を肩担荷または荷車を押して敦賀に出，呼び売り，卸売りを終えて夕刻遅く再び湖上を帰宅したの

共撰機稼働の衝に当るのは，なるほど三方町農協であるに違いないが，指導の立場からすれば，多額の費用を投じた施設だけに，この点にこだわりが出るのは当然であろう。

なお共撰品種としては別項のように“紅映”（べにさし）と“剣先”（けんざき）—べにさしは果実が紅色を呈しており，剣先はその名のように果実の頂点が尖っている。—両品種だが，このほか導入品種として11年生の“南高”を栽培している園があるそうな。南高種は樹令を重ねるにつれ結実歩合もよく，光沢のある実がとれるそうだが，“いや地性”が強いらしい。

三方町周辺の梅園は，毎年5～10町ぐらいで栽植面積がふえているらしいが，これらの新植苗は福井県の委託の15aの母樹園があり，ここで育てられている。なおこのほか，園芸センターが三方町に設けられていて，ここでは各種試験結果の検討やら，営農指導農場（梅だけで1町歩のほか，くり，なしなどの苗木が栽植されている）などが設けられている。

生産者の期待にこたえた

燐硝安加里S226号

“こういう話は現地でもお聞きになると思うので，この辺に止め，施肥の話を申し上げましょう。ご承知のように梅は他の果樹とちがい，開花，結実，発芽，展葉などはいずれも，前年からの貯蔵養分と，根から吸収した養分によって行われるので，根は開花，結実より先に活動を開始します。梅の場合最も重要なのは，開花，結実をたすける4～5月頃の追肥（実肥）と，収穫終了後の樹勢の低下を回復し，かつ来年の開花，結実などの初期生育に不可欠な貯蔵養分を蓄積するための夏肥（いわゆる礼肥）とでしょう。そのためにどうしても速効性の肥料が要求されてくるのです。だからと云って，樹体内のN濃度を高めて生理落果を助長するようでも困るし，反

梅施肥基準

時期 / 肥料名 / 樹令	3月上旬	4月上旬	5月中旬	6月下旬	9月上旬	9月中旬	12月上旬	年間成分量		
	苦土石灰	果樹追肥	果樹追肥	果樹追肥	果樹追肥	苦土石灰	果樹肥料	N	P	K
1～2年	40kg (2袋)	10kg (½袋)	5kg (¼袋)	— kg	— kg	40kg (2袋)	30kg (1袋)	kg 4.8	kg 3.9	kg 4.6
3～5年	80 (4〃)	10 (½〃)	10 (½〃)	10 (½袋)	—	80 (4〃)	60 (2〃)	9.6	7.8	10.2
6～10年	120 (6〃)	25 (1.¼〃)	25 (1.¼〃)	25 (1.¼〃)	5 (¼袋)	120 (6〃)	60 (2〃)	15.6	13.8	18.2
11～15年	150 (7.½〃)	30 (1.½〃)	30 (1.½〃)	30 (1.½〃)	10 (½〃)	150 (7.½〃)	80 (2.⅔〃)	20.0	17.6	23.2
16～20年	150 (7.½〃)	35 (1.¾〃)	35 (1.¾〃)	35 (1.¾〃)	15 (¾〃)	150 (7.½〃)	100 (3.⅓〃)	24.4	21.4	28.2
21年以上	150 (7.½〃)	40 (2〃)	40 (2〃)	40 (2〃)	20 (1〃)	150 (7.½〃)	120 (4〃)	28.8	25.2	33.2

・4月，5月の果樹追肥は，開花，結実の状態により加減する。
・6月，9月の果樹追肥は収穫量に応じて加減する。
・他に堆肥その他の有機物を2,000kg施す。

だそうである。今でもこの舟着場の跡が残っているし，その当時村の人達がくちずさんだ“梅売り唄”が民謡として今に伝っている。

その後大正10年に実現した国鉄敦賀線の完成は，この陸の孤島と云われた湖畔一帯の様相を一変させる契機となった。

すなわち鉄路による京都，大阪，金沢，富山方面への新しい販路が拡張されるとともに，栽培意欲の旺盛さは，栽培面積の急増となって現われた。

そこで昭和4年西田村では村を一円とする出荷組合を組織し，撰果の励行を規程するとともに，容器，梱包の統一，取引先の厳選などにつとめた結果，“西田梅”の声価はますます高まったが，それも今次の大戦勃発までのことであって，昭和15年に農産物統制令が公布されて，生果の輸送販売が禁止され，官憲の指示でその大部分を現地加工（梅干）に回わさざるを得ないようになってからは，重要軍需物資として舞鶴海軍軍需部に納入することを義務付けられ，残余は国の要請によって軍需工場，陸海軍地方派遣部隊に納入するの余儀なきに至った

終戦直後の食糧物資の極度の欠乏に対処するため，梅加工品は福井県当局の指示によって県内需要を優先的に充当し，残余は県の許可を得て県外に移出していたが，昭和23年農産物統制令が解除されて，暫らく振りに梅果の自由販売が復活した。

その後，国民食生活の改善に伴い，梅の消費はようやく梅干1辺倒から梅酒向けなどにも販路が拡大されるようになった。そのきっかけとなったのは，昭和35年頃行われた酒造法の改正である。

一方，福井県当局では行政面では，まず果樹集団産地近代化促進事業として積極的に取上げ，そのため県予算の6割近くが三方町に投入されたという。また39年には県の農業構造改善事業として，向笠地区に30町歩にわたり梅を植栽したが，これらも既に8年生の梅として稼動期に入っている。

面，所定量の堆肥や苦土石灰類は必ず施用してもらいたいと思います。”

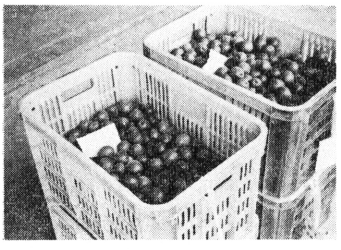
“これまで，いや現在でも“県標準果樹肥料”を使っておりますが，この“燐硝安加里S226”という肥料は“果樹追肥専用肥料”として充分生産者の期待にこたえる実績を示して呉れました。施肥基準は別表をご覧願いたいと思いますが，元肥施用も考えております。”

共撰場の右側部分

もっといろいろお話を伺いたかったのだが，明日現地へ向う都合もあるので再訪を期して普及所を辞去した。

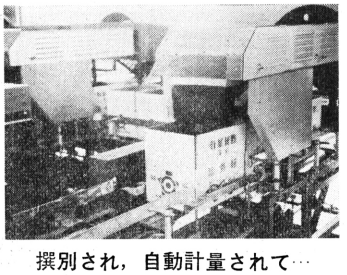
三方五湖の水と梅の開花に何か相関々係があるらしい

翌6月24日朝。梅雨どきとは思えぬほどよく晴れた北陸路を，われわれを乗せた自動車は疾走する。右の車窓から眺められた若狭湾の青い海が後になったと思うと，やがて周辺の山々が静かに影を落している三方湖畔に出て，とある清楚な建物の前で停った。三方町農業協同組合である。


続々と梅が運びこまれてくる

われわれの到来を待ち兼ねていたという，田辺さんの前任者であり，6年前からこの三方町農協におられる浜本さんの案内で，会長鳥居さんへの挨拶もそこそこに，39年に県の農業構造改善事業の指定を受けたという，30haに及ぶ向笠地区の1〜4耕区の梅園を皮切りに見学した。

“ここがそうだが，全部定置配管が施設されてありますが，39年の植栽だからちょうど8年生ということになりますな。ご覧のとおり成っておりますよ。お蔭様で他産地の不作をよそに，当地は対前年比120％という出来ですが，実を云うと，これらの梅が成り出す時分に豊作ということになりはせんかと心配していたのですが，待望の1億円突破も実現したし，わしは本当にホッとしましたなあ。”


撰別され，自動計量されて…

白髪，童顔の浜本さんの頬がゆるむ。

“梅は自花受粉と云ってね，雄芯の花粉が同じ花の雌芯の柱頭に付着して，自花受精する経済交配植物です。ではどんな品種でも定着するかというと，こんな恵まれた環境にあっても（厳寒期に降霜を見ることもないし，積雪も30cmを越すことがない。）“紅さし”や“剣先”のような地場品種はよかったのだが，南高のような導入品種は，どうも成績が悪かったようですよ。”

浜本さんの語るところによると，三方町の梅がよい実をつけるのは，ハッキリは判らないが，湖の水と開花とに何か相関々係があるのではないかということ，云いかえると，梅は湖の水によってコントロールされているのではないか—ということだ。

燐硝安加里S226号（共撰場で）

“特産西田梅原木”の所在を示す1.30mくらいの石柱が，水月湖に面した道路ぞいの伊良積共同集荷場の傍に立っている。その石柱の反対側の山寄りを約50m入ったところに，梅の老木が3本ある。

“これが天保年間に植えられた西田梅の原木といわれとるもので…。”と浜本さん。主幹のくぼみは雨水のためだろう，すでにボロボロになっているが，それでも3本ともまだどうやら葉を付けている。

市場との関係で撰果作業は日曜日になる。そこで日程を1日のばして25日の朝早く，今年から全量引受けることになったという大型撰果場へ向った。

“町村農協で全地域の共同撰果をやっとるのは，あまり無いでしょう。”と浜本さんご自慢の大撰果場は予定通り9時30分から作業開始。思い思い持ち込まれた各部落の梅は，それぞれ受付けの手続きをへたのち，投入口から次々と放り込まれて行き，自動計量されたのちパッキングされて行く。“ハテ？浜本さんは…。”と見回わすと，作業帽を冠って投入口の前で熱心に記録をとっておられる姿が見えた。

あとがき　湿舌とやら云う，甚だ迷惑なしろものが九州や中国方面を荒し巡っているようですが，皆様いかがお過しか，暑中お見舞申し上げます。（K生）